無痛分娩に関する説明書

【無痛分娩の方法】

原則硬膜外麻酔という麻酔法で行います。背中の硬膜外腔というスペースに細いカテーテルを入れ、カテーテルから麻酔薬を注入して痛みをとる方法です。ベッドの上に横向きになっていただき麻酔を行います。薬を開始するタイミングは陣痛により痛みが強まり始めた時点で開始します。麻酔を行った後は定期的に麻酔の効き、血圧などをモニターします。また赤ちゃんの心拍モニターを継続して行います。

【無痛分娩のメリット】

陣痛の痛みが緩和され分娩による疲労が軽減するといわれています。

【無痛分娩の副作用や合併症】

① **血圧低下**：無痛分娩を開始した直後にお母さんの血圧が低下することがあります。点滴を増やしたり、血圧を上げる薬を使用したりするなど適切に対応します。
② **胎児心拍数の低下**：無痛分娩を開始した直後に赤ちゃんの心拍数が低下することがあります。お母さんに酸素を投与するなど適切に対応することで、ほとんどが回復しますが、胎児心拍数が回復しない場合には、緊急帝王切開を行うことがあります。
③ **お産の進行への影響**：陣痛が弱くなり分娩の進行が遅れることがあります。いきみたい感覚が弱くなるので吸引分娩になることがあります。
④ **発熱**：硬膜外麻酔の影響で 38 度以上の発熱を起こすことがあります。
⑤ **かゆみ**：麻酔で使用するお薬の影響でかゆみを感じることがあります。クーリングなどで対応します。
⑥ **頭痛**：分娩後に頭痛が 1 週間くらい続くことがあります。鎮痛剤を処方しますが、症状がひどい場合は専門医に相談することもあります。
⑦ **神経障害**：下肢の神経障害が生じることもありますが、無痛分娩と直接関係のないこともあります。

【まれな重篤な合併症】

① **全脊髄くも膜下麻酔**：硬膜外麻酔で使用するカテーテルがくも膜下に迷入することによって起こります。局所麻酔薬使用後、急に痛みが緩和されたり、足が動かなくなったり、腕までしびれが広がったり、息が苦しくなるような症状が起こります。適切な初期対応で重篤になるのを防止する必要があります。

② **局所麻酔薬中毒**：硬膜外腔へ入れる管が血管の中に入ってしまうことがあります。耳鳴りがでたり、舌がしびれたり、けいれん、不整脈が出ることがあります。麻酔を担当する医師は、この合併症がおきないよう十分に注意していますが、発生した場合には、治療薬の投与や人工呼吸といった適切処置を行います。

③ **アナフィラキシーショック**：薬剤に対するアレルギーが原因で起こります。

④ **硬膜外血腫・膿瘍**：硬膜外麻酔で、背中に針をさすときやカテーテルを抜くときに、硬膜の外に血のかたまりがでたり、感染が起きたりすることがあります。永久的な神経の障害が残ることがあるため、できる限り早期に手術をして血液のかたまりや膿を取り除かなければならない場合があります。